

生い立ち

圓山 栄一 平成 30 年 9 月

1937 年(昭和 12 年)11 月 7 日 父圓山三郎母勝子の長男として大阪市西区江戸堀下通り 3 丁目 22 (現 江戸堀 3 丁目 92)に誕生 1942 年 2 月 11 日長女智恵子誕生 (父母昭和 12 年 5 月 14 日婚姻)
父の職業は 洗い張り(悉皆や)屋現在の着物のクリーニング屋で 屋号は(はかまや)店主は山本氏(女性)
で父は奉公人のようである、母勝子の実家も同業で勝子の父山門伊三郎母かすも洗い張りや(西区立売堀通り 2-3)どちらの店も記憶にはあるが両親の記憶は当時は無い。父三郎は 9 人兄弟妹の次男 母勝子は 8 人兄弟妹の長女である。

当時父は太平洋戦争で騎兵隊として(1941 年昭和 16 年ころ)満州やフィリピンに出征していた、この頃の話の後父からよく聞かされた、フィリピンではマッカーサーの逃げた後で馬も暑くて使い物にならず半分官費旅行やとよく言っていた、しかし内地では昭和 18 年 6 月 26 日母勝子が病死享年 29 歳で栄一 5 歳 8 か月智恵子 1 歳 4 か月であった、その後栄一は父の実家である京都府南桑田郡曾我部村穴太(現 亀岡市曾我部町穴太)に預けられる祖父圓山栄蔵(旧姓潮田圓山へ子養子)祖母アグリ(旧姓斎藤)これより私の波乱の人生が始まる、曾我部国民小学校 1 年生に就学 妹智恵子は大阪で父の後妻となったマツ子の世話になる、残何ながらマツ子の件に関しては戦時中のことやいきさつは父から聞かされることもなく、昭和 20 年 10 月 11 日に亡くなっています。

戦後 祖父栄蔵の兄である潮田家の(洋服の仕立て業で京都市川原町荒神口西入)一人娘に父が婿入り状態で私と智恵子を連れて世話になるが、どうも娘とうまくいかなかったようで半年ほどで別れることになる、注(潮田栄蔵と兄は園部落の氏族(武士)の出で栄蔵は跡継ぎのない圓山家に脇差とともに子養子に入りその後斎藤アグリ(曾我部町春日部)と所帯を持つ、潮田家に京都春日小学校に智恵子と共に 5 年 2 学期のみの入学で離れ再び曾我部国民小学校に智恵子と戻るこれも 1 学期のみで 3 学期より大阪での暮らしが始まる。

この後家族が増え新しい生活が始まる 昭和 25 年 3 学期より大阪市福島区上福島 3 丁目に住まう
父三郎 継母まさゑ(旧姓福井結婚後木村性) 栄一 智恵子 まさゑの連れ子良子(旧姓木村)の 5 人が家族としてこの日が初めて一つ屋根の下で暮らす生活が始まった、お互いの呼び方すら初めてなので困った、継母まさゑと良子とはどこの駅であったか定かでわなく電車の中で着物を着たきれいな女の人だなあと思った記憶があるこの時がお互い初めての顔合わせである、又父親や智恵子とも京都で 3、4 ヶ月他人の家で生活したのみで何か全員他人と暮らし始めたようで子供心に変な思いであった、二階建て 2 軒長屋の家であった、

父が京都の潮田叔父家で学んだ洋服の誂えものの仕立て業を始めた、父母は夜遅くまで仕事をしていたのを覚えているモーニングや背広(スーツ)をどこからか注文を取りよく自慢をしていた、少し器用さは私にも遺伝かも、しかし何しろ小学校 5 年では当時の詳しいことは殆ど覚えていない 25 年に三女廣子が誕生する。

またその後塩化ビニール(当時は酢酸ビニール)成るものが市場に出てくる何処から注文を受けたか知らないが、小さなフアスナー付きの財布がよく売れて子供たちも出来るところを手伝ったりした ちなみに当時の酢酸ビニールは水に濡れると皺や縮が出来て使い物に成らなくなった記憶がある、やがて世間で塩ビを溶着する高周波ウエルダーなるものが開発され父は近くのトランス屋さんで 500 ワットのアメリカの払い下げ真空管で機械を作ってもらったがパワーが無く 10 センチか 20 センチぐらいまでで仕事に成らなかった で 1 キロワットの機械を新たに作り何とか商売になり始めた(他社では 3 キロワットが普通資金がない)それでも作れば売れる時代である、みんなで夜通し仕事をしたことも何度もある、普通に夜 10 時が定時の時代今ならブラック企業もいいとこ、この無理がたたったか継母まさゑは胸を病み入院を繰り返して遂に手術することに成り京都蹴上のサナトリウムで手術中に心不全で亡くなりました、本当の子供のように可愛がってくれました、父にお小遣いの値上げや、クリスマスプレゼントが朝起きたら枕元に封筒に鉛筆 2 本がありました本当にうれしかったですその時に母親とは こんな人のことを言うんだと成人してから思い出しては涙することが何度もありました、昭和 33 年 4 月 27 日享年 36 歳でした、今時なら助かる命本当に残念でした、

まさゑの生家は京都府亀岡市余部町天神又 5 人姉弟の次女 父福井末吉母ふさし
その後は家族の生活も大変でした色々の方に家事手伝いや炊事洗濯と世話になりながら高校生になり何とか仕事の手伝いもやりながら 関西経理専門学校夜間部を卒業

それから数年後父に新しい彼女ができた、ある日突然に神子田通りの おくめ という飲み屋に来るように言われ行くと親父は二階で酒を飲み寝転がっていた、話と言うのはお前さえ良ければ嫁にしたい人があると、まったく予期しない話で戸惑ったがまだ私の下に三人の子供がいる、大変なことは分かるが過去の事を思うと悩む、又夜になると出かけて殆ど朝帰りの父親を見ると之も困った事で、当時としては親父が可哀そうと言う気持ちもあり了解をした、その人の名は沖本英子 30 歳 広島蒲刈島出身今で言うバツイチです。 次へ

又 新しい家族が増えた 英子は 父沖本定一 母とも 生年月日昭和 6 年 1 月 1 日昭和 37 年 8 月 16 日 三郎に入籍 上福島の自宅よりかねて購入済の古家(大淀区大仁元町 2 丁目)を解体し新築する昭和 38 年ころ

大工さんのトラブルで棟梁の前田さん(前田工務店大淀区内) 一人で暫らく建てて行く状態が続き予定より可成り長く掛かった記憶がある、棟梁は可成り拘りを私に話してくれたお宅は重たいビニールを扱うので材木や筋交いに此れでなければ持たないとこだわってくれた お陰で築 50 年過ぎても阪神淡路大震災にも持ち応えてくれた、有り難い事です。

私栄一は昭和 39 年 1 月 17 日 竹井静子と結婚する 静子の実家は京都は船井郡八木町諸畑父巳之助母こふじの三女昭和 16 年 7 月 10 日生まれ 当時父三郎の弟の林修一(子養子)家に嫁ぐ嫁の実家に 私共の仕事の手伝いをしてもらっていた明田家に静子の姉が嫁いでいた、少しややこしいがその縁で紹介婚である、

又 継母英子は広島で原爆地の整理に入り被爆した、原爆被爆者手帳を持っていた、後に毛が抜けた話をしてくれた、しかし気持ちのキツパリした人で、物の善悪をはっきりとするタイプでよく意見をしてくれまし

私たちが結婚して 1 年後長女彌希が誕生したころに、父が病に倒れほぼ 1 年後に手術のかいも無く胃がんで亡くなりました、すでに長女智恵子は京都八木の松本幹男に嫁ぎ長男(双子のうち一人生後直に亡くなる)をもうける、

又次女良子にも縁談がまとまっていたましたが、父が亡くなる寸前で父の辞退もあり婚約者の森輝夫には紹介出来ませんでした、父は波乱万丈の生活を送りましたが好きなお酒と若いかみさんにそして初孫を抱き之からと言う時と思いましたが 友人や仕事関係でお世話に成った方々からお前の親父は良い親父やったなああと後々聞かされある意味幸せやったんかなと今思います。

やがて三女廣子も加藤清己と結婚し兄妹にそれぞれ子供が出来若い英子婆さんに成りました、後に継母英子は門真に文化住宅 2 階建て4軒8戸を購入家主に成りましたが後に私の会社が不渡りを受け資金代わりに売却してもらい大変助かりました、その時の借金プラスで淀川の住宅を買いました会社負債の返済に10年以上苦しい生活が続く静子にも大変な苦勞を掛けました、母は野田阪神に小さな居酒屋(屋号とも)を持ち数年続けましたが体がしんどいと言いました、英子は毎年暮12月から冬の寒い間2月中迄広島の姉妹のところまで過ごすのが毎年の行事でしたが平成 16 年 1 月に体調不良で大阪に帰ると連絡あり、検査入院の結果肺に影があると 元々結核で入退院の病歴があり再発かと軽く私も考えていましたが、どうやら違うようで深刻な話になり直に入院することに、手術が出来ない所に腫瘍が有ると それで抗がん剤治療を始めました、しかし病気の進行が早くその年の12月24日 享年74歳でした、私たち子供を無事に育て上げてくれたことに感謝していますが、本当に色んなことを教えてくれました、一番長く付き合った母でした、その間に栄一静子の3人の子供の間に7人の孫に恵まれました、栄一まもなく83歳静子79歳

昔から親は無くても子は育つとよく言われますが、人さまの世話が無くては育た無い事を身を持って経験しました

亡くなった 父親そして生んでくれて日の目を見なかった実母勝子そして子育てをしてくれた母さんに感謝です

なかなか思いつくままなので支離滅裂ですが、構想からは10何年か経ちましたホームページ NINJA2003から何とか自分で作って見たいと、作っては潰しの連続でしたが残る命を考えると時々次に次に無くなって厳しい。

続きを思いつくまま書き続けたいと思います